て行く。

船の中では，横になつて静かに目をとじている者や，トランプに興じている者，「彼」の予想をトランプでうらなつている者等。波も静かで，船酔いする人もなく無事に四時間を過した。9時もまわつた頃，船は北海道の表玄関函館に近付いた。真黒いビロードのスクリーンに，色とりどりの星を張りつけた様にネオンサインの美しく光る港の中へ，船はしだいにエンジンをゆるめながら，ゆっくりと入つて行つた。今夜は函館の郊外温泉町湯の川温泉で北海道の一夜を迎える事になる。

札幌から網走まで

大食三　　弘田勝子

なつかしの京都をあとにして，まだ四日しかたつていないというのに，円山公園という言葉を聞いただけで，はや胸の迫るような郷愁を感じました。長かつたドンコウ列車から解放されて，久しぶりにナイフとフォークで旺盛な食欲を満たすや，一風呂あびて，旅の疲れを吹きとばすと，三々五々と連れだつて四条河原町ならぬ札幌の大通りへと吸いこまれて行きました。札幌の町も又京都と同じく碁盤の目のように区画されていて，その街路の両側に茂るアカシヤの並木や大通の花壇，大芝生，そびえたつテレビ塔等には，どこかしら近代的なムードがあふれていました。円山ハウスのようなユース・ホステルは，私達若人にとつて，非常に魅力があつた。梯子をのぼつてベツトの中へもぐりこみ，なつかしい故郷の父母や友へのたよりに余念のない人，又日頃のお行儀の上さを発揮して下の人に叱られる人，カーテンから首だけをのぞかせて話をしている人等皆それぞれに楽しい一夜を過ごしました。翌朝，北海道ならではのおいしい牛乳で喉をうるおし，旭川へと向つた。旭川では，私達京女生とゆかりの深い朝倉先生にお会いし，京都での想い出話に花が咲き，何かしらまだ夢のようで北海道へ来ているという実感がわきませんでした。旭川からのバスは天井がほとんどガラス張りになつていて層雲峡の岩々を見ることができるように設計されていました。層雲峡への道すがら，はかなくも美しいアイヌの悲恋伝説にうつとりとしていると，いつしか窓外の景色は男性的な雄壮な眺めとなつていた。大雪山の北東　に

深く刻まれた大峡谷がやゝ開けかけた附近から勝景がはじまり，七賢峰，寿老岩，孤蝶岩，残月峰，地獄谷など１６０メートル余りの大岩壁が両岸にそびえ，素晴しい岩肌を見せていた。私達は鼻の頭を天井に向け，あちらこちらとガイドさんの号令に合わせて首の運動をはじめました。岩の奇異な形にも随分驚かされましたが，沿道に鬱蒼と茂るエゾマツ，トドマツの原始林と渓谷美のすばらしさも又つたない筆舌などではとても表現することができません。神仙橋を渡ると，層雲峡温泉があり「今夜はここでおとまりです」というガイドさんの声を聞くと，一同大喜びでバスがびつくりする程の歓声をあげて，層雲閣を後にし，大函，小函へと向つた。真の渓谷美はこのあたりからはじまり，遊神峰，吐月峰，不忘峰，夏雲峰が前後に勝ち誇つたようにならび立ち，河の中には蓬莱岩があつた。蓬莱岩の対岸に沿つてさらに進むと，九十九滝があり，又雄滝，雌滝といわれている流星，銀河の大滝が断崖から流れ落ちていた。さらに先には，遊仙台の奇勝や雲井滝，柱状節理を見せている大絶壁の天城峰があり，羽衣岩，姫岩のある小函の絶景地をすぎ，そこから大函までは頭上をおおう大岩崖の下をとおり名のようにまるで函の底を進んで行きました。丁度，うす闇の迫りかけた黄昏時，層雲閣についた。旅に疲れた私達の旅情をなぐさめてくれるのは何といつても食事です。ここでは春にしか食べたことのない蕗を頂き，太いのにかかわらず柔かくおいしかつたのにはおどろきました。又，この旅館は北海道で第二に大きい旅館だそうで，色々と娯楽施設もととのつており，大浴場も又素晴らしかつた。マロン風呂の階段を降りると，色とりどりのネオンで装飾された大浴場があり，まるでおとぎの国へでもきたかのような錯覚をおこす程でした。この日は，層雲峡の絶景に感嘆し，御馳走を食べ，温泉で疲れをいやし，クラス全員が同じ部屋で寝ることになつたので，歌つて，踊つて，語り合つて，本当に楽しい想い出多い一日でした。豪華な峡谷美を前にうつそうとした原始林に囲まれた仙境の層雲閣とも別れをつげて，バスで上川駅へ行つた。際果ての地，網走までは又黒い煙をはく汽車の旅でした。ここでは汽車が遅れましたので一時間あまり待ちました。北海道らしいのんびりさが感じられました。さて，私達は"網走"と聞けば何かしら暗い荒涼とした風景を想像致します。何故なら，遠い北東の果てにあり，又刑務所で有名だつたから。しかしながらこの付近の風景はそうした予想を裏切つて，清く美しくかつ雄大でした。オホーツク海に面した海岸部は砂丘，潟湖，草原，森林などからなつていて，その北欧をおもわせるような牧歌的な風景に，私達は，はじめて北の国の印象を強く感じました。霧雨に煙る知床半島の山々，荒々しく寄せてくるオホーツクの波，又つきることを知らぬ草原に牛馬の放牧された雄大な景色を窓外に眺めながら，

かの名高い原生花園へと車は走つて行きました。七月頃に咲き乱れた原生草花も今は，わずかにバラ色のハマナスの花だけをのこして，姿をかくしてはいましたけれど，この北国の美しさは，肌寒い霧雨の降る中で頂いたおいしい牛乳の味と共に生涯わすれることができないでしょう。さて，網走市は三大魚場の一つに数えられるオホーツク海を控えた魚の都だけあつて，町全体が魚のにおいで満たされていた。職業柄，すぐ食物のことが気になるので，ここでの珍料理をつけ加えておきます。グロテスクな毛が一杯はえた毛蟹のごち走でした。蟹が食べたくて旅行に来たとかいうお嬢さん，ひげもじやの蟹と握手をして大喜こびの夕食でした。風呂に入つてもまだ魚のにおいの消えない網走の旅館には，どこかしら親しみやすい庶民的な雰囲気が感じられました。外では，やみそうにない雨がしとしとと降つていた。

食後網走の町へ名物のニポポを求めて，宿屋の大きなゲタをつつかけ番傘をさしてテクテク歩いて行く。

行く店々で受り切れと告げられ，それでもあきらめ切れずやつと駅前で見付けた時は予定よりも多く買つてしまうくらいの嬉しさ。宿に持ち帰ると皆のうらやむこと

（ニポポとはその持ち主の願いをきつとかなえてくれると云うアイヌの守り人形である。）

なぜにかくもしつこくニポポを求めるや／　皆の心中は？

明くる日，朝食の膳に向う時誰かがサケがついてると話してる。

これはどうしたことだろうと急いで膳を見てみるとサケ（酒）ではなくてシャケ（鮭）だつた。これは本当にシャケだつた。こんなエピソードも何となく解放感の味わえる旅の空ならでは。……

この日もあいにく，朝から雨。

天都山へ向う車中，晴れやらぬ空を見上げる皆の顔も曇りがち。晴れた日には，網走国定公園，阿寒国立公園が見えるという。天都山。深い霧の中にしばしたたずみ，後髪を引かれる思いをしながら，車中の人となる。それに比して，皮肉にも刑務所だけは遠目にもはつきり見えた。

網走湖畔をドライブしつつ，今回旅行の最大目的地，美幌峠ー摩周湖へと向う。美幌峠へ近ずくにつれて増々霧が深くなる。バスを下りると案じていた通り一面霧の海。私達は霧のたちこめる美幌峠から見下して，絵ハガキなどで見知つたうろ覚えの気憶を頼つて大観を頭にえがくより仕方がなかつた。美幌を後に山を下りるに従つて，山上での霧はまるでうそのよう。木の間もる明かるい光に次の地への期待は大きい。

しかし，又，しとしと降り出した雨の中を屈斜路湖へと急ぐ路々，車中からは果しない原始林が所々に見られ，そのあい間あい間にひつそりと面はゆげに咲いているサビタの花は，私達の旅情をなぐさめてくれる。

屈斜路湖で下車し，湖のほとりを歩いている時，なぜかしら現実とかけ離れた感傷にさそわれ，湖の中にすい込まれそうに感じた。水の中では寒さを感じないのか，カーディガンを引つかけて歩いている私達と対象的に，湖で泳いでいる人を見受ける。

昼食を取りに川湯温泉へと向う。

川湯を発つて間もなく，巨大な岩山が見えて来た。かすかな硫黄の臭と共に，もうもうと立ちこめる煙がはつきり目に入つて来る。下車した時には強い硫黄のにおいに一瞬息苦しく感じたほどである。その名の如く，硫黄におおわれた硫黄の山。山の途中まで登つて，臭の強さに耐えられず，引つ返してしまう。

硫黄山を後に，又，山に登るに従つて霧が深くなつて行く。

"神秘の湖"　摩周湖はついに湖面を表わさず，私達をがつかりさせた。あきらめ切れぬ想いの私達は，明朝晴れることを祈りつつ宿へ向つた。宿で入れてくれた火鉢のまわりにまるく陣どり，暖つたかいお茶を飲む。それが真夏の八月にもかかわらず不思議と自然に感じられた。

釧路から札幌まで

短食二の二　　大浦多恵子

8月8日　朝はやく，宿の後の釧路川に行つてみた。とりはだがたつ程の涼しさだつた。真夏の京都では想像も出来ない。

今朝も又くもり。摩周湖は今日も朝から霧のベールの中に，神秘なその姿をかくしているとのこと，何よりの心残りだつた。

9時に宿を出て，47.7曲り。スリルと移り変るめずらしい景色を心ゆくまで楽しみながら，2キロのドライブコースを阿寒へと急ぐ。途中のくちはてた木の枝にからむサルオガセに奇異を感じた。箱根の渓谷を思わせる絶壁にヒヤヒヤしたり，ホツとしたり，思わ